見聞録

The 5th Korea – Japan Joint Symposium '99 on Hydrogen Energy, Taejon, Korea, Nov. 26th 報告

東海大学工学部　内田　裕久

1．はじめに

第五回韓国－日本水素エネルギーシンポジウムが，1999年11月26日，韓国テジョン市ユソン温泉にあるユソンホテルを会場に開催された．第三回シンポジウムも同じ場所で開催されており，ご存じの方も多いであろう．

主催した韓国水素エネルギー協会 J.Y.Lee 会長のお話によると，昨年までの予定では今回のシンポジウムを韓国東部のキョンジュ（慶州）で開催する計画であった．しかし韓国の経済不振の影響もあり，シンポジウム実施への経済的な問題もあったとお聞きした．同じ場所で再び実施したわけであるが，会場となったユソンホテルの宿泊費が前回よりも安くなっていたことに気づかれた参加者もいたと思う．これも Lee 会長のご配慮であった．

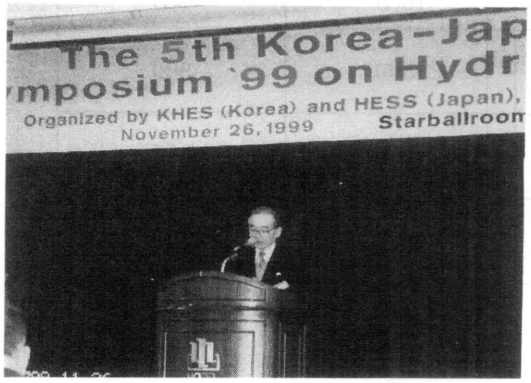

写真1.　開会式で挨拶する斉藤 HESS 会長

シンポジウム前日の11月25日の夜，韓国風しゃぶしゃぶ鍋を囲みながら開催側の韓国関係者と日本側関係者の懇親会が開かれた．この席で，来年度から韓国の水素エネルギー協会（Korean Hydrogen Energy Society :KHES）会長が，KAIST（Korean Advanced Institute of Science and Technology, Taejon）の Prof. J.Y. Lee から，2000年はじめに KIER（Korean Institute of Energy Research, Taejon）の Dr. K.S. Sim に交代する旨が伝えられた．

2．参加人数と発表件数

今回のシンポジウムは参加者数120名と大盛況であった．内訳は韓国70名，日本49名，ベラルーシ1名であった．また特筆すべきは，大学院生をはじめ，若い研究者が多数参加したことである．Lee 会長も大変喜ばれていた．

写真2.　開会式と参加者

発表数は49報で，口頭発表（パラレルセッションで13報づつ）26報，ポスター発表23報であった．今回は発表件数が多く，パラレルセッションという形式をとったが，両会場での発表はどちらも興味深いものであり，この発表件数を一日で実施することには無理があったといわざるえない．

主催者側も本当は2日間かけてシングルセッションで開催したかったようだ．

1時間のポスター発表時間も短く，今回の発表件数では2日間が適当であったと思われる．過去のシン

ポジウムを考えれば，予想以上に増えた参加者数には，うれしい悲鳴，またはうれしい誤算とでもいうべきかもしれない．今後の発表件数の動向は，本シンポジウムの実施方法に大きく影響するものであり，次回開催を担当する日本側 HESS も心してかかる必要があろう．

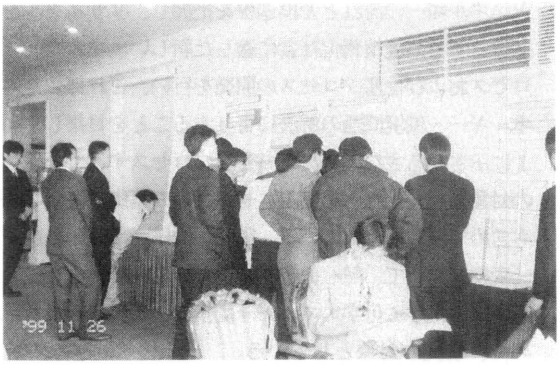

写真 3.　ポスターセッションで聞き入る参加者

3．発表内容

口頭発表（26 報）とポスター発表（23 報）の内容を分類すると，

水素吸蔵材料	
（ニッケル水素蓄電池関連も含む）	22 報
水素発生関係	6 報
触媒及び燃料電池関係	11 報
熱利用	4 報
燃焼関係	2 報
液体水素技術	1 報
日本の WE-NET 関係	3 報

以上，計 49 報であった．

従来は水素を利用したシステム関係の発表が多かったが，最近の水素利用技術開発の動向が反映し，ニッケル水素蓄電池及び関係する電気化学関係の材料研究，さらに燃料電池関係の触媒，システムに関する発表が多くなっている．

発表件数を反映して，本シンポジウムのプロシーディングスは 461 ページという厚いものになった．

4．韓国からの提案と今後の課題

今回のシンポジウムで，韓国側から今後のシンポジウムの実施方法についてつぎのような提案があった．

(1) 日本と韓国以外の国々を含めた形で，多数国参加による国際シンポジウムにし，より多く，より広く水素エネルギー関連情報を集める．

(2) 第 6 回シンポジウムは 2 日間で，3～4 カ国程度の参加によるシンポジウムとしてはどうか．

この提案に関しては，日韓水素エネルギーシンポジウムが発足した経緯，また現在，水素利用システム関係の研究成果の発表が多い World Hydrogen Energy Congress(WHEC)，水素と材料の相互作用，ニッケル水素電池等の材料の基礎研究成果の発表が多い International Symposium on Hydrogen-Metal Systems, Fundamental and Application(ISHMS) が国際的な大集会として存在している状況などを考慮する必要がある．次回のシンポジウム計画までに考えねばならない課題である．

どのような形になっても，本シンポジウムが今後大いに発展することを期待したい．

写真 4.　バンケットで演奏する韓国伝統音楽団